ワレモコウの匂い（8月の自然庭園では）～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

ワレモコウの匂い（8月に自然庭園で観察できる動植物について）

みぬま見聞館の自然庭園では、まだ暑い日が続いていますが、「紅染月」（べにぞめつき）と呼ばれる8月の別名が示すように、植物たちも紅葉の準備を始める季節を迎えようとしています。今月は、そんな小さな秋の気配を感じさせる自然庭園の片隅で、はかなげに花を風に揺らしているワレモコウについてお話をさせていただきます。

ワレモコウは、バラ科ワレモコウ属の多年草で、太く短い地下茎から伸びた細い茎の先に、暗い赤紫色（あかむらさきいろ）の小さな花が密集した穂状花序（すいじょうかじょ）と呼ばれる楕円形の花をつけます。他の穂状花序（すいじょうかじょ）の花を咲かせる植物が、下から上に向かって咲かせていくことが多い中で、ワレモコウは上から下に向かって花を咲かせていきます。花が咲き終わった後も、花には濃い紫色が残っているように見えますが、これは萼片（がくへん）と呼ばれる花の一番外側にあたる部分で、花ではないのだそうです。
名前の由来は、むかし神様が赤い花を探しに地上に降りてきたものの、見つからないため帰ろうとしたところ、私も紅色（くれないいろ）ですよと自らささやいたので、「吾（われ）もまた紅（こう）なり」からきているとか、キク科の木香（もっこう）に似た香りがすることから吾木香（われもっこう）が変化したとか言われていて、他にも数多くの説が語り継がれているようです。

ワレモコウは平安時代中期に編纂された源氏物語や、鎌倉時代に兼好法師が書かれた徒然草にも登場する古い名前ですが、日本最古の百科事典ともいわれている平安時代の和名抄（わみょうしょう）と呼ばれる書籍には、「阿夜女太無（あやのたむ）」、とか「衣比須弥（えびすね）」とも記載されています。
現在では「吾輩は猫である」の吾（わが）に木の香りと書く「吾木香」（われもこう）や、吾（わが）に色を示す赤（あか）と紅(べに)と書く「吾亦紅」（われもこう）が一般的な名前のようです。
源氏物語では、第42帖の匂宮（におうみや）に、光源氏（ひかるげんじ）亡き後、火が消えたように寂しくなった六条院での、「匂兵部卿（におうひょうぶきょう）」と、「薫る中将（かおるちゅうじょう）」と呼ばれていた二人の女性の物語が描かれていて、その中にワレモコウが良い香りの植物の一つとして登場しています。また徒然草では、庭に植えてみたい秋の植物として登場しています。
どちらも面白いのですが、私は明治時代の歌人である若山牧水が歌集「別離」の中で詠った「吾木香　すすきかるかや　秋くさの　さびしききはみ　君におくらむ」（われもこう　すすきかるかや　あきくさの　さびしき　きはみ　君におくらむ）という歌が好きです。
意味としては、ワレモコウもススキも枯れてしまったでしょうか、そんな枯れてしまった寂さの極みである私の心を、あなたに送りましょうとなるのでしょうか。
これは、当時別れた園田小枝子（そのださえこ）に送ったとされる歌ですが、こちらも源氏物語に負けないくらい波乱万丈な恋愛物語なので、気になる方は是非一読することを、お勧めします。

ちなみに、ワレモコウの花言葉は、「変化」とか「移り行く日々」、深く愛して慕う（した）という意味の「愛慕」（あいぼ）などです。
香りの好みは、時代とともに変わっていくと言われることがあるようですが、古くは下痢止めや止血の薬としても利用され、良い香りの一つとして数多くの文学作品に登場するワレモコウの花の香りを確かめに、みぬま見聞館の自然庭園を訪れてみてはいかがでしょうか。

ワレモコウ

ワレモコウの花

	小さな花が上から下に咲いてゆきます
 ワレモコウの顎片 よく見比べると確かに花の状態とは違います	 キツネノマゴ 可憐で小さい花が次々に咲きます
 キンミズヒキ 黄色の小さな花がたくさん咲きます	 キンミズヒキの花 花が終わったあとの実は引っ付き虫になります
 ガガイモの花 特徴的な花を咲かせます	 セイヨウミヤコグサの花 鮮やかな色の花が集まって咲いています
 カブトムシ 夏の昆虫といえばカブトムシと・・・	 コクワガタ ・・・クワガタですよね

 ツクツクボウシ 力強い鳴き声が響きます	 ツクツクボウシの抜け殻 つい集めてしまった方も多いのではないでしょうか

お知らせ